

詩

坑夫の歌

労働、旅浪、監獄より

××を憎み ××を呪ひ ××に背きて

労働 放浪 監獄の連鎖

暗黒 冷酷 苛酷の底から

求むる人間の眞實の生活

若葉の清新 ダリアの情熱

眞夏 眞晝の太陽の白熱

××に×せよ！

××を断ち切れ！

××××に火花を散らせよ！

奴隷に生くるか 自由に死するか

勇往邁進生命の跳躍

王冠の志より

流浪の旅より

獄舎の窓より

狼火をあげよ

略取の巷に狼火を擧げ

××の××にハンマを打ち振れ

力に目覺めし勞働者の威力

××××のまことの威力

大地を踏みしめ彼等に示せ

措むな××捧げよ××

ナツバに血潮は生活の表象

(宇都宮監獄時代)

鎖よ血潮よ

高尾兄に捧ぐ

一 空にはうれし酒の色

一行抹殺

おゝ××の子の腕の

鐵の鎖よ高く鳴れ

一 今宵はうれし鐵の窓

おゝなつかしき石の壁

二行抹殺

鐵の鎖よ胸の血よ

なつかしうれし牢獄は

おゝ生活のシンボルぞ

一行抹殺

(一九二一、九、一九 栃木分監にて)

ス
バ
イ

スパイ!

スパイ!

憎むべきは彼のスパイ!

われ等が運動の深刻になれば

それにつれて活躍せんとする彼のスパイ!

ある時はまことなる勇士のごとく

手に旗をとりて行列の先頭に立ち

またある時は群衆の中にピラを撒きて

最も熱烈なる勇士の如く振る舞ふ

貧困と缺乏の中よりなりし

われ等の新聞のごとく押へられしも

われ等の同志の幾人が また幾十人が

妻子を残して牢獄の中に呻吟するも

すべて憎むべき彼のスパイの活躍

彼はまたわれ等が物質的弱者なるを利して

怖るべき金銭の誘惑をも試む

あゝ吾等の同志の如何に多くが

この壓はしき陥穿に掛りしことを！

同じ國 同じ人種に生れ來て

同じ苦痛をなめ乍ら

敵に身を賣る

おゝ憎むべき彼のスパイ！

雪の線路を歩いて

貧しさの爲に俺は歩けり
ひとすじの道 雪の線路を俺は歩けり
貧しさの爲に歩ける俺には
火を吐きて 煙を擧げて
罵る如く 汽笛を鳴らして
走りゆくあの汽車が憎し
文明の利器なれども俺には憎し

ひもじさの爲に疲れて歩ける俺には
それ食へがしに汽車の窓より
穀の辨當を投げつくる人の心が憎し
とりわけて今 村を追はれて歩ける俺には
スチームに温められて
安らかに旅する人の心はなほ憎し

われ等が汗にてなりし
秋の收穫を取り去る代りに

彼の怖ろしき文明の病毒を運び来る

あの汽車は

毒蛇のごとくたまらなく憎し

毒蛇のごとくたまらなく憎きはあの汽車

野獸の呪ひのごとく 夜も日も唸りて

若き男女の幾群を

あゝ痛ましき都會の工場に送り出す

たまらなく憎さはあの汽車

五行抹殺

貧しさの爲に歩ける俺には

村を追はれて歩ける俺には

ひとすじの道 雪の線路を歩ける俺には

文明の利器なれどもたまらなく憎し

闇に戦く

煤煙 塵芥 漲る毒瓦斯
 日光は閉され 空氣は濕り
 汚物の嗅ひ タールの嗅ひ
 さてまた機械のやみなき騒音
 心は亂され 眠りは奪はる
 闇の底から呻きがもれ來る
 肺病喘息の咳がふるへる
 雪の降る日に子供が踊る

四辻にさらされた子供が踊る
 泣くよな聲で唄つて踊る
 路傍の奴等が笑つて見て行く
 哀れ少女が稼ぎに出掛ける
 雪の降る夜に稼ぎに出掛ける
 肉の切り賣り パンの一片
 どん底の生活制度の惡夢
 工場を追はれ社會を追はれ
 仕事を奪はれ 權利を奪はれ

自由を奪はれ たつた一つの
 権利も奪はれ 長屋に追はれる
 光も熱も 朝の空氣も
 只一枚の新聞も奪はれ
 飢と寒さにみんなが戦く
 どん底の生活 闇に戦く

(労働者第一號より)

狂へる労働者の夜

正義とな!

人道とな?

そして自由 平等の爲だとな?

アハハハハ——

アツハ——

角帽の學生さん

静かな眠り 夜の眠り

自由の眠りを醒さずに呉れ給へ

あなたの聲が聞えた爲に

あなたの姿が現はれた爲に

静かな眠り 夜の眠り

自由の眠りが奪はれてしまつた

早く其處を退いて呉れ給へ

直ぐに其處から立ち去つて呉れ給へ

行かなければ承知しねぞ！

その髪が嫌 その言葉が嫌

寢衣にレーンコートの革命家面！

被つた角帽は本能的に嫌なんだ

正義が何んだ

人道が何んだ

奪はれたる自由の爲に

身を持つて投げつけむとするものの心には

最早正義も 人道も

口にする暇あることなし

早く立ち去れ！

(巢鴨保養院時代)

文明病

自動車の唸り

電車の軋り

バチバチ閃く電柱の放電

怖し 痛まし 都會の巷

銃劔の閃めき 女工の袖の血

銃劔に刺された女工の袖の血

眞紅に滴る女工の袖の血

その血を怖れて俺は倒れた

俺は病氣か？

文明が病氣か？

(巢鴨保養院時代)

工場の隅より

天涯 孤角 海山隔てゝ

貧苦 缺乏の拾有餘年

煤煙漲る工場の隅より

呪へり 今も 追はれし故郷

故郷の言葉よ 呪咀のひゞき

暗黒 冷酷 苛酷のほかには

思ひ出あらざる悲痛のその名よ

追放故ぞ 放逐故ぞ

勞働 放浪 監獄の連鎖

暗膽悲慘の生活の中より

恨みは深し 故郷の山川

追はれしその夜の 馬車の轍は

その夜 そのまゝに夢をば破る

呪ひの故郷よ 恨みの故郷よ

追はれしその口の一人青年は

冷酷 苛酷の地上の一角に

眞赤な××の胸を抱いて

追はれし故郷に×××あがる

××を圖れり

小作人の叫び

米を作り 作つた米が喰はれない
 こんな制度に だまつてをれるか
 汗たらし 作つた米は奪はれる
 こんな制度はなくしてしまへ

踏みしめし この土こそは

小作人の歌

土地自由 これぞ唯一のモットーぞ
 農民運動の唯一のモットーぞ
 旗に書せ 土地よ……………

……………自由

聯合の社會を眼指して
 團結の偉力を信ぜよ 俺達は俺達で行け

葬れ指導者

貧困の鐵鎖を切れよ 壓制の鞭に抗せよ

.....

以下四節抹殺

(小作人第五號より)

小作人の聲

のろし火

燃えろ

燃えろ

燃えあがれ……

地主の納屋に倉庫に

田にも畑にも燃えあがれ！

村から村へ燃えあがれ！

村を追はれし農民の

やむにやまれぬ××の

赤い炎よ燃えあがれ！

小作百姓の戦術を

分らぬ奴に見せてやれ！

飽食暖衣の地主奴に

マツチの威力を見せてやれ！

火の舞踏

秋は來た

凋落の秋が來た

脊を伸ばし

獄舎の窓より見渡せば

おゝ——野に山にさてはまた

森に林に凋落の

見よ傷ましい秋は來た

秋が來たのだ わが友よ

工場の友よ

ほろび行く

汝が青春の血を惜しめ

ハンマ振りすて 野に出でよ

野には榮華に酔ひ果てし

あゝ枯葉がうちなびく

この枯草に火を放て

放ちて踊れ火の舞踏

生の歡喜の火の舞踏

われとわが身の燃ゆるまで

踊りつくせよ火の舞踏

そのあとにのみ とこしえの

われ等の春の芽が生る

採炭夫の歌

底だ 底 底 どん底だ
 この世の底だ どん底だ
 もしも堤防が崩れたなら
 瓦斯が爆発したならば
 水攻め 火攻め その上に
 天井がバレたら生き埋めだ
 底の底なるどん底に

この世の底のどん底に
 俺は炭掘る採炭夫

飽食暖衣のブルジュアの
 ×××××が見憎けりや
 腕にや覺えたツルがある
 汚れた世界の果までも
 赤い××で染めてやる

(三池炭坑時代)

坑夫の歌

暗い 暗い 眞暗い

こゝは地の底 海の底

闇の底なるどん底に

石炭稼ぎの俺ら坑夫

朝の闇から夜の闇にかけて

どこに太陽は照るのやら

闇に埋るゝ俺ら坑夫

闇に埋るゝ俺等が心

どうせ夜も日も眞暗だ

暗い片端の岩陰に

マイトを抱いて寝る心

荒んだ心のやりごころ

酒や女に満さりよか

底の底なるどん底で

この世の底のどん底で

荒んだ心のやりどころ

五行禁止

夜もなく日もなくツル振つて

最後に自分の體まで

突込む愚な仕事から

顔をそむけた 目が覺めた

「坑夫する身と空飛ぶ鳥」の

歌に唄はれた俺等がいのち

どうせ××なら白熱の

一行抹殺

(松島炭鑛時代)

一坑夫の言葉

俺は裸體の一坑夫
賣られ買はた一坑夫
闇に埋れた一坑夫
理屈は知らぬ一坑夫
書物も讀めぬ一坑夫
何も知らない一坑夫
だが是丈は知つて居る
長い勞働の暮しから
ただ是丈は知つて居る

暗い 暗い 眞暗い

この世の底のどん底で

闇の底なるどん底で

天井はバレるどん底で

水は滴るどん底で

瓦斯は漲るどん〇で

働く俺等が一時に

握つたツルを捨てた時――

炭堀ることを止めた時――

憎い 見憎いブルジュアの
地上世界の果までも

何んな世界になるのかを

俺は充分知つてゐる

握つたツルを捨てた時――

炭掘ることを止めた時――

その時 汽車も動くまい

固より汽船も浮ぶまい

その時 都會の奴共は

遊民共は食料を？

何處から何うして運ぶだらう？

決して一粒 一本の

米も 野菜も得られまい

更に衣服の原料は

何處から何うして運ぶだらう？

決して一本 一握の

絹絲も綿も得られまい

汽車や汽船が動かねば――

また斯う云ふことも知つて居る

智識を誇る學者等が

洋行せねば貰へない

大事な欲しい學位さへ

汽車や 汽船が動かねば――

貰へぬことも知つて居る

握つたツルを捨てた時――

炭掘ることが止んだ時――

工場 仕事場の齒車の

たゞの一つも廻るまい

工場 仕事場の齒車が

みんな一度に止んだ時――

日用品の何物が

彼等の慾望に添はれやう

飽くに飽くなきブルジュアの

その食欲に添はれやう

握つたツルを捨てた時――

炭掘ることが止んだ時――

まだ人類の幸福に

如何なることを齎すか

分らぬ奴に教へやう

握つたツルを捨てた時――

炭掘ることが止んだ時――

恐らく電氣も燈るまい

固より瓦斯も燈るまい

紅い電燈が消えた時――

輝く瓦斯が消えた時――

夜の巷に何人が

おゝ 安全に歩けやう

まして虚榮に満ち満ちた

紳士淑女と云ふ奴の

眼を嬉ばす劇場に

何うして灯りが燈さりよう

握つたツルを捨てた時――

炭掘ることを止めた時――

地上世界の惨劇が

如何なるものか知つてゐる
俺はまだまだ知つてゐる
けれども最早この上は
分らぬ奴には教へまい
二度も三度も教へまい
たゞその時の惨劇を
分らぬ奴に見せてやろ
ツルを投げつけて見せてやろ
ハツバを掛けて見せてやろ
カンテラ飛して見せてやろ

ガンヅメ打ちつけ見せてやろ
ホゲを放つて見せてやろ
俺は裸體の一坑夫
賣られ買はれた一坑夫
闇に埋れた一坑夫
理屈は分らぬ一坑夫
書物も讀めぬ一坑夫
何も知らない一坑夫
だが是丈はして見せる
(伊田炭礦時代)